

# 二者会話場面における 日本語の「この」「その」「あの」の選択

## —日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較

杉村 泰

### ◆要旨

本稿は日本語の指示詞「この」「その」「あの」の選択について、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の違いを比較したものである。特に話し手と聞き手が隣同士並んで会話をしている場面で、眼前の指示物を指す場合について分析した。その結果、①実際の事物を指す場合、日本人も中国人も遠くにあるものは「あの」を選択しやすいが、近くにあるものに対しては「この」「その」「あの」の選択に揺れが生じること、②画面の中の人物を指す場合に日本人は「この」を選択しやすいが、中国人は「あの」を選択しやすいこと、③音やにおいを指す場合に、日本人も中国人も発生源が見えると「あの」の選択率が高くなり、発生源が見えないと「この」の選択率が高くなることなどを指摘した。

### ◆キーワード

指示詞、コソア、現場指示、文脈指示、  
中国人日本語学習者

### ◆ABSTRACT

The purpose of this paper is to clarify the difference of the choice of Japanese demonstrative “*kono*”, “*sono*” and “*ano*” in conversations between native speakers of Japanese and Chinese superior level learners of Japanese. A speaker and a listener were talking next to each other. The survey results suggested as follow: (1) For indicating a real object, both native Japanese speakers and Chinese learners of Japanese choose “*ano*” if it exists in distance, but choose “*kono*”, “*sono*” and “*ano*” if it exists near to the speaker. (2) For indicating a person in the picture or a screen, native Japanese speakers had a tendency to choose “*kono*”, but Chinese learners of Japanese had a tendency to choose “*ano*”. (3) For indicating invisible sound or smell, both native Japanese speakers and Chinese learners of Japanese choose “*ano*”, if the source of sound or smell was visible, but choose “*kono*”, if it was invisible.

### ◆KEY WORDS

Japanese demonstratives, *ko so a*, deictic references, anaphoric reference, Chinese Learners of Japanese

## On Choice of Japanese Demonstrative “*Kono*”, “*Sono*”, “*Ano*” in the Conversation between a Speaker and a Listener

A comparison between native speakers of Japanese and  
Chinese superior level learners of Japanese

YASUSHI SUGIMURA

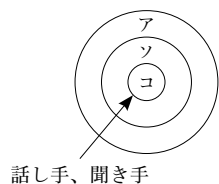
# 1 はじめに

本稿は日本語の指示詞「この」「その」「あの」の選択について、日本語母語話者（以下「日本人」と呼ぶ）と中国語を母語とする上級日本語学習者（以下「中国人」と呼ぶ）の違いを比較したものである。このうち、特に二人の人が隣同士並んで会話をしている場面において、眼前の指示物（音やにおいも含む）を指す場合について論じる。

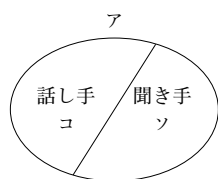
日本語の指示詞（コッア）は大きく分けて次のように分類できる。

- I. 現場指示（①融合型、②対立型）
- II. 非現場指示（③文脈指示、④記憶指示）

現場指示（融合型、対立型）は話し手または聞き手の眼前にある指示物を指す用法で、非現場指示は会話や文章の中に現れる指示物を指したり（文脈指示）、記憶の中にある指示物を指したり（記憶指示）する用法である。このうち、現場指示（融合型）は図Aのように話し手と聞き手が融合した立場に立つもので、両者に近いものを「コ」、両者から遠いものを「ア」、そのどちらでもないものを「ソ」で表す。一方、現場指示（対立型）は図Bのように話し手と聞き手が対立した立場に立つもので、話し手の領域に属するものを「コ」、聞き手の領域に属するものを「ソ」、そのどちらにも属さないものを「ア」で表す。



図A 現場指示（融合型）



図B 現場指示（対立型）

以上のことは先行研究ですでに指摘されていることであるが、日本語教育の

観点から見ると、次の点においてなお検討の余地があると思われる。

- (A) 心理的な遠近の判断基準を探る必要がある。
  - (1) [映画館で一緒に映画を見ながら]  
(この、その、あの) 女優の名前、何て言うの？  
……日本人は近称の「この」を選択する人が多いが、中国人は遠称の「あの」または中称の「その」を選択する人が多い。
- (B) 融合型と対立型の選択基準を探る必要がある。
  - (2) [相手の口の口紅を見て]  
(この、その、あの) 口紅、すてきだね。  
……日本人は対立型の「その」を選ぶ人がほとんどであるが、中国人は「その」を選ぶだけでなく融合型の「この」を選ぶ人もいる。
- (C) 現場指示と非現場指示の選択基準を探る必要がある。
  - (3) [友達の部屋で一緒にBの子供の写真を見ながら]  
A: (この、その、あの) 子、最近見ないけど、今どうしてるの？  
B: (この、その、あの) 子は、去年交通事故で死んじゃったの。  
……Bにおいて「この」は現場指示、「その」は文脈指示、「あの」は記憶指示を表す。いずれも使えるが、日本人は「この」と「その」の選択が多く、中国人は「この」と「あの」の選択が多い。

指示対象を遠いとするか近いとするか、融合型と捉えるか対立型と捉えるか、現場指示と捉えるか非現場指示と捉えるかということは必ずしも自明のものではなく、母語話者ごとの違いがあると思われる。本稿はそれを解明するための基礎研究として位置付けられる。

## 2 先行研究

日本語の指示詞に関しては、佐久間（1951）、高橋（1956）などの先駆的な研究に始まり、多くの研究がなされている<sup>[1]</sup>。これには庵（2007）、陳（2015）など非現場指示の用法について論じたもの、迫田（2001）など学習者の習得過程

について論じたもの、木村 (1992)、王 (2004)、単 (2011)、金井他 (2011) など対照研究の観点から論じたもの、張 (2001) など誤用研究の観点から論じたものなどがある。これらの多くはコソアの選択が相対的に複雑な非現場指示の解明に焦点が置かれ、コソアの選択が比較的単純な現場指示についてはあまり焦点が置かれていない。しかし、現場指示の用法も学習者にとっては必ずしも自明のものではないため、さらなる検討が必要である。

このような中で現場指示について興味深い考察を行った研究に李 (2010) がある。李 (2010) は「筆者は実体験で、一緒に映画館で映画を見ている友人 (日本人) が、映画の出演者を指差し「この人、誰？」というのを聞いて、なぜ映画の中の人物は物理的には遠いところにあるのに「あの」ではなく「この」という近称の指示語を使うのだろうか」と疑問に思ったことがある (p.178) と述べ、「本研究の目的は現場指示 (特に融合型) の使用実態調査により、韓国語母語話者と日本語母語話者の指示対象の捉え方、その認識のあり方 (物理的・心理的遠近感覚) を把握し、両者の共通点及び相違点を探ることで、その成果を指示語の指導に貢献できる資料としたい」 (p.178) とし、表1の場面における日本語と韓国語の近称 (コ、オ)・中称 (ソ、コ)・遠称 (ア、ジ) の選択傾向の違いについて論じている。

李 (2010) は、仮説Aではテレビを指す場合とテレビの中の人物を指す場合

表1 仮説に基づいた分類基準 (李2010の表3)

現場指示の融合型				
場面の状況	問	場面	指示対象	仮説
目に見える指示対象	問1	6畳の部屋	テレビ	A: 実際の事物と画面の中の人物の差
	問2	6畳の部屋	テレビの中の人物	
	問3	映画館	映画に出ている人物	B: 障害物の有無の差
	問4	バス	バスの窓の外の大型スクリーンに映っている人	
	問9 問10	タクシー	20メートルくらい離れている建物	D: 動的な空間と静的な空間の差
目に見えない指示対象	問5	友達の家	音楽	C: ①回想文と推量文の差 ②推量文の中での事物の特性や種類による差
	問6	友達の家	物が割れる音	
	問7	友達の家	動物の鳴き声	
	問8	友達の家	赤ちゃんの泣き声	

では違いがあると予想した結果、日本語も韓国語もテレビの中の人物を指す場合の方が遠称 (ア、ジ) の選択率が高くなり、韓国語の方がその程度が高いことや、中称 (ソ、コ) はほとんど選択されないことなどを指摘している。また、仮説Bでは障害物の有無によって違いがあると予想した結果、韓国語では両者に差がないが、日本語では障害物のある方が遠称 (ア、ジ) の選択率が高くなることを指摘している。しかし、映画館とバスでは状況がかなり違うので、同じ大型スクリーンで比較するなど、なるべく似た条件で障害物の有無の差を見たほうがよいと思われる。また、映画館の場合はむしろ、仮説Aのテレビの場合と比較したほうがよいと思われる。

仮説Cでは音を指示対象にして、回想文と推量文では違いがあると予想した結果、日本語も韓国語も推量文の方が遠称 (ア、ジ) の選択率が高くなること、回想文の場合は韓国語の方が遠称の選択率が高くなるが、推量文の場合は日本語と韓国語で差がないことなどを指摘している。しかし、李 (2010) は回想文と推量文を比較しているのか、音楽と物が割れる音を比較しているのかよく分からない設定なので、音の種類を統一して比較する必要がある。また、音源が見えるかどうか (見えなくても音源の位置が特定される場合も含む) も重要な要素であると思われる。さらに音だけでなくおおいの場合も比較したい<sup>[註2]</sup>。

その他、李 (2010) は話し手一人の発話しか見ていないが、それを受けた聞き手の反応も見ると、第一話者と第二話者の違いを見ることができると。さらに母語話者だけでなく学習者も調査すれば、言語教育に貢献する研究となる。

### 3 アンケート調査の概要

本研究では李 (2010) の研究をもとに、例 (4) のような二者会話場面を32場面設定し、日本人と中国人にアンケート調査を行った。各設問には場面設定がしやすいように、問題文のすぐ横に次のような挿絵を付けた。

(4) [映画館で一緒に映画を見ながら]

- A: (この、その、あの) 女優の名前、何て言うの?
- B: (この、その、あの) 女優の名前は深田恭子だよ。



中国人用のアンケートでは場面設定の部分を「[在电影院一起看电影]（映画館で一緒に映画を見ながら）」のように中国語で提示した。この32場面の指示対象と分類基準を表2に示す。これを以下の被験者に与え、「この」「その」「あの」のうち最も適当なものを一つ選択してもらい、その選択率を比較した。

- ・日本語母語話者（日本人）：名古屋大学の学生112名（2016年5月に実施）
- ・中国語を母語とする上級日本語学習者（中国人・N1合格者）：上海師範大学、南国商学院、大連工業大学、西安外国語大学の日本語学科の学生79名（2016年5、6月に実施）

表2 32場面の指示対象と分類基準

指示対象		分類基準	
視覚	部屋の掛け時計 部屋のテレビ	実際の事物と画面の中の人物 ・垂直方向か水平方向か ・相対的に近いか遠いか ・話し手の質問の違い	
	テレビの中の人物（3問） 映画の中の人物（3問）		
	直接見た大型スクリーンの人物 バスの窓から見た大型スクリーンの人物	・障害物の有無	
	上空を飛ぶ鳥 上空にある星座	実際の事物 (空をスクリーンに見立てる)	
	近くを歩いている犬 遠くを歩いている犬	話し手や聞き手からの距離（遠近） ・話し手や聞き手に付着していない	
	話し手が抱えている子供 聞き手が抱えている子供	所持物：人間・物・身体の一部 ・話し手または聞き手に付着している ・話し手の領域か聞き手の領域か	
	聞き手が持っているバッグ 聞き手の口の口紅		
	子供の写真（2問） 夫の写真（2問） 先生の写真（2問）	写真の中の人物 ・聞き手と指示対象との関係の違い ・聞き手の反応の違い	
	聴覚	音楽（+窓の外の演奏者）推量	・音源が見えるかどうか ・音源が聞き手かどうか
		音楽（+窓の外の音源が見えない）推量	
音楽（+窓の外の音源が見えない）記憶			
泣き声（+窓の外の音源が見えない）推量 音楽（+話し手の隣の演奏者）記憶			
嗅覚	匂い（+窓の外の料理）推量	・においの発生源が見えるかどうか ・においの発生源が聞き手かどうか	
	匂い（+窓の外の料理が見えない）推量		
	匂い（+話し手の隣の調理人）記憶		

## 4 指示詞選択の分析

本稿では3節で示した32場面のうち、以下の図1～図18の場面について論じる。図1～図18は「この」「その」「あの」の選択率を百分率で示したもので、「日」は日本人、「N1」は中国人（上級日本語学習者）、「A」は第一話者、「B」は第二話者を表す。以下、4.1では「指示対象の遠近感覚」、4.2では「実際の事物と画面の中の人物」、4.3では「障害物の有無」、4.4では「融合型と対立型」、4.5では「音の場合」、4.6では「においの場合」について論じる。

### 4.1 指示対象の遠近感覚

まず実際の事物に対する話し手の遠近感覚について見る。現場指示（融合型）の場合、話し手と聞き手の両者に近いものを「コ」、両者から遠いものを「ア」、そのどちらでもないものを「ソ」で表すのが基本である。しかし、これは話し手の心理的な遠近感覚によるため、その実態を明らかにする必要がある。

図1の「上空を飛ぶ鳥」や図2の「夜空の星」のように指示対象が話し手や聞き手の領域外にある場合、日本人は、第一話者（以下「A」と呼ぶ）はほぼ全員が「あの」を選択しているが、第二話者（以下「B」と呼ぶ）は「あの」の選択率が90%前後と下がり、「その」が10%前後選択されている。このことから、Bも現場指示（融合型）で「あの」と言うのが基本であるが、Aの発話を受けて文脈指示で「その」と言う人も1割ほどいることが分かる。

一方、中国人Aは「あの」を選択する人が80%前後と多いが、「その」を選択する人も15～20%ほどいる。しかし、「この」はほとんど選択されていない。このことから、遠くの指示物を「あの」で指すという感覚はかなり身に付いているものの、「その」との区別が少し難しいことが分かる<sup>[注3]</sup>。これに対し、中国人Bは「あの」の選択率が55%ほどしかなく、40%弱の人は「その」を選択している。この場合、単に現場指示（融合型）の「あの」と「その」を混同しただけであれば、Aと同じような選択率になるはずである。しかし、Aに比べてBは「その」の選択率がかなり高いため、別の要因があると考えられる。すなわち、Bで「その」を選んだ人は、現場指示（融合型）の「あの」と「その」

を混同した可能性もあるが、Aの発話を受けて文脈指示で「その」を使っている可能性もあると考えられる。

次に図3と図4を比較する。遠くを歩く犬の場合、上空を飛ぶ鳥や夜空の星と同じように日本人も中国人も「あの」が選択されやすい。一方、近くを歩く犬の場合は、日本人も中国人も「この」だけでなく「その」や「あの」も選択されている。このことは近くと言っても話し手の手元になれば、人によって距離感に違いのあることを示している。あるいは、図4に付けた絵を見て、犬が聞き手側にいると捉えて「その」を選んだ人もいたかもしれない。以上のように物理的に明らかに遠い指示物は心理的にも遠く感じるのに対し、近くの指示物は人や状況によって遠近感に差が生じることが分かる。

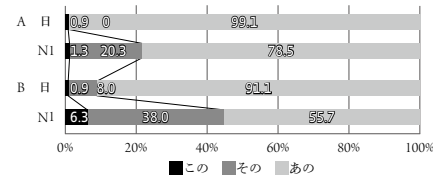
次に図5と図6を比較する。日本人は自分が抱いている子供には「この」を使い、相手が抱えている子供には「この」も「その」も使う。相手が抱えている子供の場合、指示物が自分の近くにあると捉えれば「この」(融合型)が選択され、指示物が相手領域にあると捉えれば「その」(対立型)が選択されると考えられる。一方、中国人は図6では日本人と同じような選択率になるのに対し、図5では日本人と違い、AもBも「この」の選択率が70%前後になっている。これは図6のAとBの絵の順番が会話の順番と逆で分かりにくかったためであると思われる。

## 4.2 実際の事物と画面の中の人物

次に図7～図10を比較する。図7のように数メートル先の距離にあるテレビの場合、日本人も中国人も指示対象を近くに感じ、「この」の選択率が60～70%と最も高く、「その」は20～30%、「あの」は10%に満たない数字となる。

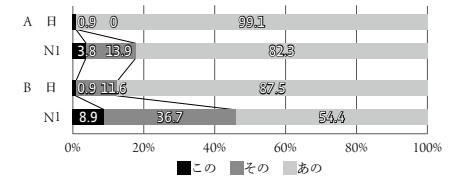
これに対し、図8のようにテレビの中の人物の場合、日本人Aは登場人物を身近に捉えて「この」を選択する人が約80%と多いが、テレビの向こう側の人物として遠くに捉え、「あの」を選択する人も約20%いる。しかし、テレビ本体と違い「その」はほとんど選択されていない。一方、中国人Aは「この」が50%ほどしかなく、「その」が30%弱出現している。これは中国語では遠称と中称の区別がなく、「あの」と「その」の区別が付きにくいためであると考えられる。また、日本人Bはテレビ本体を指す場合とコソアの選択率がほぼ同

図1 [上空を飛んでいる鳥を見て]  
A: (この、その、あの) 鳥の名前は何ですか?  
B: (この、その、あの) 鳥の名前はコンドルです。



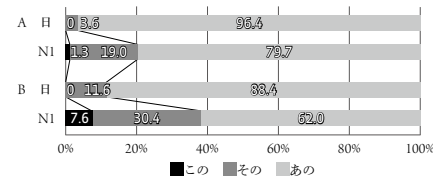
(図1の挿絵)

図2 [夜空の星を見て]  
A: (この、その、あの) 星座の名前は何ですか?  
B: (この、その、あの) 星座の名前はオリオン座です。



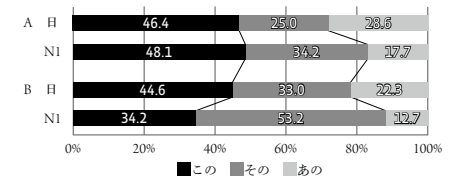
(図2の挿絵)

図3 [遠くを歩いている犬を見て]  
A: (この、その、あの) 犬の名前は何ですか?  
B: (この、その、あの) 犬の名前はプードルです。



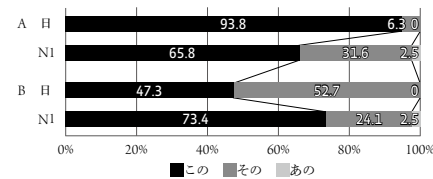
(図3の挿絵)

図4 [近くを歩いている犬を見て]  
A: (この、その、あの) 犬の名前は何ですか?  
B: (この、その、あの) 犬の名前はプードルです。



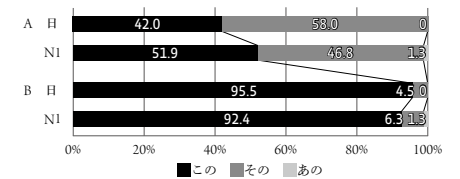
(図4の挿絵)

図5 [Aが抱いている子供を見て]  
A: (この、その、あの) 子はどこの子ですか?  
B: (この、その、あの) 子はうちの子です。



(図5の挿絵)

図6 [Bが抱いている子供を見て]  
A: (この、その、あの) 子はどこの子ですか?  
B: (この、その、あの) 子はうちの子です。



(図6の挿絵)

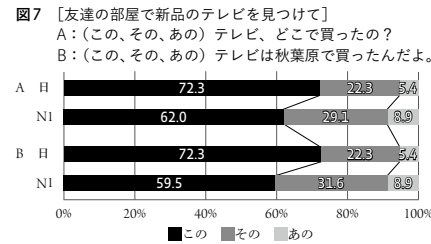
じであるが、中国人Bはテレビ本体を指す場合より「その」の選択率が高くなり、中国人Aの約2倍となっている。このことから、中国人Bは中国人Aの発話を受けて文脈指示で「その」を使っている可能性があると考えられる。

一方、図9、図10のように映画の登場人物の場合は、指示対象が物理的に遠くに見えるため、日本人も中国人もテレビの場合より「あの」の選択率が高くなる。しかし、それでも日本人はAもBも中国人より「この」の選択率がかなり高い。このように中国人は物理的に遠ければ遠いと捉えやすいのに対し、日本人は物理的に遠い人物であっても、その人を身近に感じて心理的に近く捉えやすいという違いが見られる。ただし、図10のように映画の登場人物がBの知り合いの場合は、そうでない場合に比べて中国人Bの「この」の選択率が高くなる。これはその人物を心理的に近く感じるためであると考えられる。しかし、この場合に日本人Bの選択率は図9でも図10でもあまり変わらない。

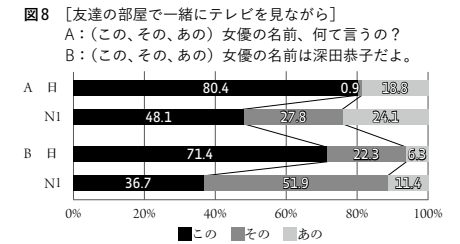
ところで、テレビや映画の中の人物の場合、「この」は現場指示であるとも考えられるが、テレビ番組や映画のストーリーを先行文脈とした文脈指示であるとも考えられる。このことは、図11、図12のビルの大型スクリーンのようにストーリー性が弱いと「この」の選択率が低くなることから推察される。

### 4.3 障害物の有無

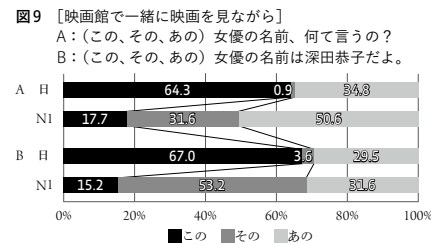
次に図11と図12を比較する。李(2010)は、日本人は話し手と指示対象の間に障害物がない場合は「あの」も「この」も選択するが、障害物がある場合は「あの」しか選択しないことを指摘している。しかし、李(2010)は映画館とバスの窓から見た大型スクリーンを比べたものであり、必ずしも障害物の有無だけを比べたものではない。そこで本調査では同じビルの大型スクリーンを指示対象にして障害物の有無を比べたところ、両者にほとんど差はなかった。日本人も中国人も映画の場合より「あの」の選択率が高いのは、ビルの大型スクリーンは一時的に見るのが普通で、ストーリー性が弱く、文脈指示の「この」よりも現場指示(遠称)の「あの」に傾きやすいためであると考えられる。この場合もテレビや映画と同様に中国人Bは「その」の選択率が高くなっている。



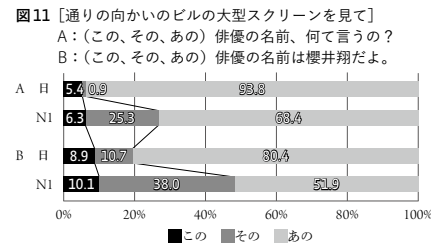
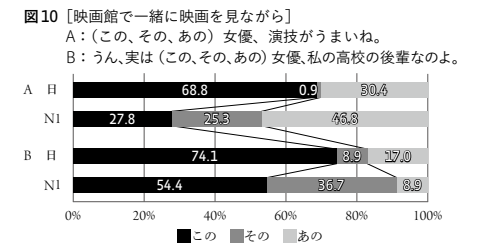
(図7の挿絵)



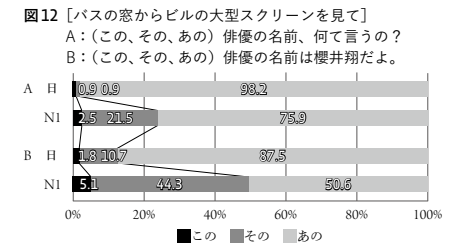
(図8の挿絵)



(図9、10の挿絵)



(図11の挿絵)



(図12の挿絵)

#### 4.4 融合型と対立型

次に図13と図14について見る。張(2001)は中国人に「あなたの\*この(→その)口紅、すてきね」という誤用が見られることを指摘して、「相手の近くにおいて日本語ならば普通「そ」しか使えないものも、腕を伸ばして指して言えば、中国語では次の例(4)(引用者注:“这包是外国货把。”(そのかばん、外国製でしょう。))のように「这」でも構いません(p.5)と述べ、「この発想で学習者はタイトルである「あなたのこの口紅、すてきね」のような言い方を口にしてしまうのです(p.6)と論じている。

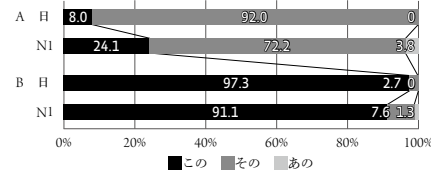
これに関して本稿の調査では、日本人はほぼ全員、Aでは「その」、Bでは「この」を選択するのに対し、中国人は、Bでは日本人と同様に「この」を選択するものの、Aでは「その」だけでなく「この」を選択する人も25~30%ほどいた。このことから相手の所持物や身体を指す場合、日本人は相手の領域にあるものとして対立型で捉えるのに対し、中国人の中には自分の近くにあるものとして融合型で捉える人もいることが分かる。これは張(2001)でも論じられているように、中国語では相手のものでも話し手のすぐ近くにあるものは近称の“这”で表すことができるという母語転移によるものであると考えられる。

ところで、図13、図14と図6を比べると、日本人も中国人もバッグや口紅より子供の方が「この」の選択率が20ポイント以上高くなっている。これはバッグや口紅に比べ、子供は相手の所有物であるという感覚が弱くなり、相手領域を表す「その」の選択率が低くなるためであると考えられる。この点については今後所有傾斜の観点から分析したい。

#### 4.5 音の場合

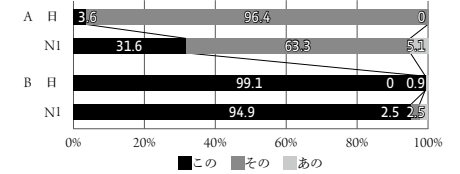
次に図15と図16を比較する。日本人も中国人も音源が見えると「あの」の選択率が高くなり、音源が見えないと「この」の選択率が高くなる。これは音源が見えると遠くにある対象物に視点が行きやすいのに対し、音源が見えないと話し手のイマ・ココにある音に視点が行きやすいためであると考えられる。日本人に比べて中国人の方が「この」の選択率が低く、「その」の選択率が高くなっている理由については、今後明らかにしていきたい。

図13 [相手の持っているバッグを見て]  
A: (この、その、あの) バッグはどこで買ったんですか?  
B: (この、その、あの) バッグはイタリアで買いました。



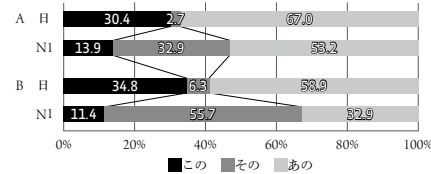
(図13の挿絵)

図14 [相手の口の口紅を見て]  
A: (この、その、あの) 口紅、すてきだね。  
B: ありがとう、(この、その、あの) 口紅はバリエで買ったのよ。



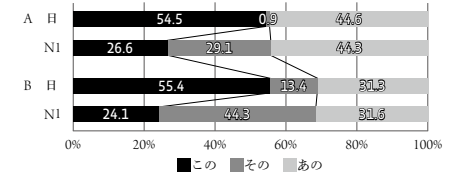
(図14の挿絵)

図15 [窓の外で誰かが楽器を鳴らしているのを見ながら]  
A: (この、その、あの) 音は何ですか?  
B: (この、その、あの) 音は、夏祭りの練習をしている音です。



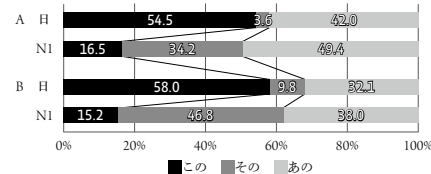
(図15の挿絵)

図16 [窓の外から泣き声がするのを聞いて]  
A: (この、その、あの) 泣き声は何ですか?  
B: (この、その、あの) 泣き声は、隣の赤ちゃんの泣き声です。



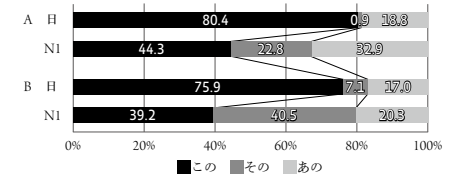
(図16の挿絵)

図17 [窓の外で誰かが料理をしているのを見ながら]  
A: (この、その、あの) 匂いは何ですか?  
B: (この、その、あの) 匂いは、カレーを作っている匂いです。



(図17の挿絵)

図18 [窓の外から漂ってくる匂いを嗅いで]  
A: (この、その、あの) 匂いは何ですか?  
B: (この、その、あの) 匂いは、カレーの匂いです。



(図18の挿絵)

## 4.6 においの場合

最後に図17と図18を比較する。日本人も中国人もおいの発生源が見えると「あの」の選択率が高くなり、においの発生源が見えないと「この」の選択率が高くなる。これはにおいの発生源が見えると遠くにある対象物に視点が行きやすいのに対し、においの発生源が見えないと話し手のイマ・ココにあるにおいに視点が行きやすいためであると考えられる。また、音の場合と同様に日本人に比べて中国人の方が「この」の選択率が低く、「その」の選択率が高くなっている。

以上のように音やにおい、さらに光の場合も話し手や聞き手と指示対象との様々な関係によって、指示詞コソアの選択に違いが見られる。この点については今後さらに明らかにしていきたい。

## 5 まとめ

以上、本稿では二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択について、日本人と中国人の違いを見た。その結果を表3に整理する。

表3 日本人と中国人の日本語の指示詞（コソア）の選択傾向

指示対象	日本人（母語話者）	中国人（上級日本語学習者）
実際の事物 ・話し手から離れている場合（テレビ、犬、鳥）	現場指示（融合型）	現場指示（融合型） ・「ソ」の過剰使用（Bの場合は文脈指示の可能性はある）
・話し手または聞き手に接している場合（子供、バッグ、口紅）	現場指示（対立型） or 現場指示（融合型） （バッグ、口紅は融合型になりにくい）	現場指示（対立型） or 現場指示（融合型） （バッグ、口紅も融合型が可能）
画面の中の人物 （テレビ、映画）	現場指示（融合型） or 文脈指示の「コ」 ・「ソ」が少ない	現場指示（融合型） ・日本人より「ア」や「ソ」が多い
（ビルの大型スクリーン）	現場指示（融合型） ・本調査文では障害物の有無による差は見られない	現場指示（融合型） ・「ソ」の過剰使用（Bの場合は文脈指示の可能性はある）
音、におい	現場指示（融合型） ・音源やにおいの発生源が見えると「ア」の選択率が高くなり、それが見えないと「コ」の選択率が高くなる ・日本人に比べて中国人の方が「この」の選択率が低く、「その」の選択率が高い	

従来、非現場指示に比べて現場指示の研究はあまり進んでいなかったが、話し手の認知的・心理的捉え方の違いという観点からなお研究の余地がある。今後、話し手や指示対象の数、位置、状態など様々な場面設定をして、心理的な指示詞選択の基準を明らかにしていきたい。  
〈名古屋大学〉

付記

本稿は平成28-32年度日本学術振興会科学研究費基金（基盤研究（C））「中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号16K02809）による研究成果の一部である。

### 注

- [注1] …… 指示詞の研究史に関しては森塚（2003）に詳細な記述がある。  
[注2] …… 聴覚や嗅覚と違い、味覚の場合は遠くの味を味わうという場面設定が難しいため、分析対象から外すことにする。  
[注3] …… 日本語が近称・中称・遠称の3体系であるのに対し、中国語は英語と同様に近称の“这”（thisに相当）と遠称の“那”（thatに相当）の2体系であることによると考えられる。

### 参考文献

- 李賢淑（2010）「現場指示使用に見られる認識の差に関する韓日対照研究—現場指示の融合型を中心に」『日語日文学』45, pp.177-196. 大韓日語日文学會  
庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版  
王亜新（2004）「文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違—日文中訳作品の実例分析」『東洋大学紀要「言語と文化」』4, pp.83-98. 東洋大学言語文化研究所設置準備委員会  
金井勇人・金善花・ジョセップ・ブラウィタ（2011）「日本語と諸言語の対照について—インドネシア語・韓国語・中国語と」『国際交流センター紀要』5, pp.17-34. 埼玉大学国際交流センター  
木村英樹（1992）「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』pp.181-211. くろしお出版  
佐久間鼎（1951）「指示の場と指す語—「人代名詞」と「こそあど」」『現代日本語の表現と語法（改訂版）』厚生閣〔金水敏・田窪行則（編）（1992）『日本語研究資料集』指



- 示詞』pp.32-34. ひつじ書房 所収]
- 迫田久美子 (2001) 「学習者独自の文法」『日本語学習者の文法習得』pp.3-23. 大修館書店
- 単娜 (2011) 「日中両言語におけるダイクシス指示表現の比較対照—認知言語学的な観点による一考察」『東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部』18, pp.123-133. 日中対照言語学会
- 高橋太郎 (1956) 「「場面」と「場」」『国語国文』25(9). 京都大学文学部国語国文学研究室 [金水敏・田窪行則 (編) (1992) 『日本語研究資料集』指示詞』pp.38-46. ひつじ書房 所収]
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
- 陳海濤 (2015) 「ア系文脈指示詞と聞き手の存在認知に関する研究」『芸術工学研究』24, pp.1-12. 九州大学大学院芸術工学研究院
- 森塚千絵 (2003) 「日本語の指示詞コアとその習得研究の概観」『言語文化と日本語教育』2003年11月増刊特集号, pp.51-76. 日本言語文化学会